

第二部門〈次代を担う子どもの育成に関する論文または実践記録〉入選論文

いじめ・不登校問題等と向き合って

高 賢 一

〔梗概〕

私は、公立中学校・公立高校在職中も、そして現在も、いじめ・不登校問題を中心として教育相談活動に積極的に関わっている。大学に在職するようになってからは、大学での学生相談活動はもちろんのこと、公立高校や公立中学校のスクールカウンセラーも担当する機会に恵まれた。これまでの教員生活では、とりわけ教育相談活動に力を注いできたと言っても過言ではない。単にいじめ問題や不登校問題を解決するためのノウハウを追究するのではなく、子どもたちが価値観の多様化した複雑な現実社会に生きていくための「生きる力」を身につけるために、学校として何ができるのか模索し続けてきたし、現在も取り組んでいる。

ところで、不登校のケースは一つ一つ異なるものであり、数学のように一つの公式に当てはまるというものではない。学校へ行きたいという気持ちはあっても登校できないタイプ、いわゆる怠学傾向のある不登校タイプ、神経症などの疾患を抱えて登校できないタイプ、さまざまな要因が重なり合っている複合型の不登校タイプなど、実にさまざまである。しかし、私に関わっているケースの中には、神経症特有の症状が見られず、一見怠学かと疑われるケースも増えているように思われる。

本稿では、葛藤形成にまで至らず、自我の脆弱さもみられる「葛藤の少ない無気力型不登校」の事例を通して、その特徴を見つめ直し、こうした事例の支援策を考察する。また、とりわけ学校へ行きたくても行けない子どもの不登校問題に、学校としてあるいは親としてどのように関わったらいいか、また、そのほとんどが学校で発生すると言われるいじめ問題やその他の問題について、私がこれまで試行錯誤を繰り返してきた教育相談活動や体験等を踏まえた提言を試みたい。このような提言が、学校関係者や保護者の方々の参考になったり、今日の教育問題に一石を投ずることになれば幸いである。

第一章 不登校問題について

一、葛藤の少ない無気力型不登校ケースに向き合って（脚色あり）

高校一年生のAさんは、夏休み明けから登校しなくなったため、担任は積極的に電話連絡や家庭訪問などを繰り返したが、なかなか功を奏さず八方塞がりの状態が続いていた。スクールカウンセラーとしても、担任や母親との面談を続けながら、さまざまな方法で本人の学校復帰を支援したが、全く動く気配は見られなかった。担任や母親の話からは、自分の意思で高校に入学はしたものの、「学校に行く目的も興味もない」「おもしろくない」などと言っているとのこと。だからといって進路変更するか、他の高校を再受験するとか、あるいは社会に出て働くというわけでもない状態であった。

秋も深まった十一月に入り、突然学校に出てきて「長く休んでいてすみません」などと、これまで何事もなかったかのような感じて、あっけらかんと登校してきた。担任も私も、いったいこれまでの取り組みは何だったのかと、まるで肩透かしをくらったような感じであった。高校に入学する時、Aさんは他人にはできない何か特別なことができると話したり、誰かが自分のことをきくと認めてくれることを期待していたようである。しかし、高校入学後は普通の成績はとっていたものの、Aさんにとっては、決して満足のいく成果をあげられるものではなかった。些細なことでクラスメイトと口論になったり、好きな友達から決別宣言をされるなど、Aさんはしだいに自信をなくし、そんな自分にイライラしている様子であった。

このような状態の中で、夏休みを迎えることになったわけである。Aさんは、母親の登校刺激に対して、「いろいろと考えたいことがあるので、あまり構わないで欲しい」と答えていた。母親は、そのようなAさんの

悲観的な現実を受け入れながらも、ふがいない子どもであると嘆いていた。私も担任も、Aさんの突然の登校に驚くばかりであったが、面談を重ねるにつれて本人自身の中に得体の知れない不安や怒りが抑圧されていることがわかってきた。Aさんは、周りの友人に対して努めて明るく振る舞うことから、「明るく行動的な生徒」という印象を周りに与えていたのである。

しかし、無理をしてひょうきんにふるまい、ふざけたり冗談を言ったりしては自分を装っていたが、こうしたやり方が周りに通じなくなってきたのである。落胆と屈辱の中で、もうこれ以上みじめな気持ちにはなりたくないという思いが強くなり、自分の性格を変えていく決意をしたのである。Aさんは、今までのやり方が通用しなくなってきた、自分の無能さや弱さが見破られるのではないか、そのことで自分が傷つけられるのではないかと不安が募ってきたようである。その不安に脅えながら、どうしようもない状態で立ちすくんでいるように見えた。Aさんは、幼い頃は友達にいじめられることが多く、人前では常に一歩引いて遠慮していたこと、母親が自分のことをもっとかばって欲しかったことなどを話してくれた。幼児期においては、母親に対しての基本的信頼感が獲得できなかったものと思われる。

二、Aさんとの面接過程と変化

Aさんが登校しなくなつて三カ月余り、なぜか二週間から三週間に一度のペースで私との面談を続けることができた。しかし、コンビニや図書館など、自宅と相談室、理髪店以外の場所へ出かけたりすることはなかった。家では、本を読んだりテレビを見たりして過ごしていた。自分の性格を何とか変えたいというAさんの願いとは裏腹に、遅々として進まない性格改造に焦燥感や絶望感が襲いかかっていた。Aさんとの面談

を通して、たとえ僅かであっても本人なりに成長・変化してきたことを見逃さずフィードバックする作業を大切にしたい。Aさんの背景には、脆弱な自我と他人に対する依存性に対する危機感、内在する攻撃性などが渦巻いていたが、他人に対して依存的になりがちな自分への気づき、そうならないようにしようと努力しているAさんの積極的な姿勢に対してエールを送り続けた。

Aさんには、間違いはきちんと正さなければならぬという正義感がある一方で、平気で悪いことをしてしまう自分自身の二面性に葛藤がみられた。そうした背景には、過去に壮絶ないじめを受けたことに対する強い怒りがある一方で、そうした怒りを性格改造に結びつけられない自分に対する嫌悪感が錯綜していた。このような自分との戦いを繰り返す中で、学校と相談して親戚の紹介によりコンビニでアルバイトをする決意をした。コンビニでのアルバイトは、Aさんにとって試練の場ではあったが、このような社会体験を通して彼の気持ちが大きく変化していった。他人(店長など)から感謝されるという体験が少なかったAくんにとって、自分の存在価値を認められる絶好の機会となったのである。

Aさんにとって、学校に登校するとかしないとかの問題は二の次であり、自分探しの半年間であったことに何の悔いもないという自負心さえ感じられた。不登校そのものに対する葛藤は少なかったが、Aさんにとっては自分自身に対する問いかけと自分自身の存在意義を確認する大切な半年間であったといえよう。周りにはいろいろと心配をかけたものの、むしろ不登校できたことに対する感謝の気持ちを家族や私に伝えるほどの成長ぶりであった。不登校に陥ることで、本人や家族が罪悪感を抱えたまま人生の落伍者かのように自信をなくしてひきこもってしまうケースが多い。Aさんの場合は、家族の葛藤や動揺を横目に見ながら、自分の生き方を追い求め、それを成長の糧にしていたケースであり、無気力の中にも積極性を感じさせるものであった。

現在、私は大学に勤務する傍ら、地域貢献の一環として公立高校のスクールカウンセラーも担当しているが、かつて高校現場で長年にわたって教育相談業務に携わってきた経験がある。したがって、数多くの不登校・いじめ問題等に取り組むことになるわけであるが、登校したくても登校できない神経症的な不登校に関わるケースが圧倒的に多かった。中には、どうしても不登校になってしまったのか自分でもよくわからず、悶々とした日々を送ってしまうケース、全くやる気をなくしてしまった無気力型の不登校ケースなどに関わることも少なくなかった。Aさんに類似したケースに遭遇することもあったが、家庭環境や本人の性格傾向など、一見同じように見えるケースでも一つ一つ微妙に異なっている。

三、葛藤の少ない無気力型不登校の支援

Aさんの事例を通して感じたことは、Aさんには強迫的・自己愛的な性格傾向、他人依存的な性格傾向が混在していることである。面談の過程では、自分の気持ちをつめ、心の中に潜む押し込められた不安や怒り、そして恐れなどに目を向けていったのである。Aさんは、面接の全過程を通してかなり防衛的になっていたが、本人の傷つきやすい性格を察しつつ、防衛的な姿勢を尊重しながら関わっていった。また、現実的なことから身を遠ざけ、空想の中を漂ったり、失望感の中で依存的になったり、攻撃性を露にすることもあったが、彼にとっては必要なプロセスであったと思われる。

さまざまな事情から、それぞれの子どもが抱えている葛藤が表面化しなくなると、その分これまで以上に周りの人に理解してもらいにくくなってしまい、葛藤の少ない無気力な不登校としてとらえられることが多い。どこにも行き場を見つけないことができなくなった子どもたちの気持ちは、より追い詰められていく形となっていく。こうした子どもたちに

対しては、以下の方法で支援してみてはいかがだろうか。

一点目は、「登校すること」が目的なのか、あるいは結果なのかを考えながら子どもを支援してみることである。担任や友人との関係の中で、子どもが少しでも安心感や信頼感を味わえるように支援していく。二点目は、節目を活かす準備を整えてみることである。学期初めや学年の初め、卒業、小学校から中学校、中学校から高校への進学など、節目節目のところで、本人に対して適切な働きかけと支援を行ってみることである。

私は、かつて不登校の子どもたちの学校復帰を支援する教育支援センター（適応指導教室）に勤務していたことがあるが、自信をなくして自己肯定感が低くなった子どもたちに、さまざまな方法で安心感や信頼感を取り戻す工夫を重ねた。また、節目節目のところで、子どもたちにチャレンジ週間を設定し、たとえ小さなものや当たり前のことであっても、子どもたちが自ら掲げた目標にチャレンジさせた。その結果、少しずつではあるが、前向きに生きようとする子どもたちの心の変化を肌で感じ取ることができた。

四、保護者自身の気づきを通して

私は、不登校の子どもを抱える保護者の学習会（親の学習会）のアドバイザーとして長く関わってきたが、親の学習会に通っていないながら、原因探しと方法探しの発想に長い間こだわり続けた母親がいたことを鮮明に記憶している。しかし、有効だと思われる何らかの方法にしたがって親と教師が努力を重ねたとしても、それが果たして実を結ぶかどうかは疑問である。むしろ必ずしもその通りにはいかないことが多い。なぜならば、その思いや実践がわが子のためを考えてやっていることだとしても、実際には登校しないわが子を見つめる自分の苦しきから親自身が解放されたいという気持ちの現れに他ならないからである。

ところが、そんな努力を繰り返しても再登校ができないという現実には直面しても、すぐに子どもの苦しみや悩みに関心を向けることができる親はそれほど多くはない。むしろ多くの親たちは、自分の子育てを点検したり、自分自身に関係した問題探しを本格的に始めるものである。しかも、それは同時に伴侶である夫や妻の性格や子育てについての欠点探しを伴うことが少なくない。そうすると、いくつもの問題点が発見されるし、それに対する自己批判と伴侶への批判意識が顕在化し、夫婦の表情は険しくなり、家の中の雰囲気はますます重苦しいものに変化していくことが多い。

冷静に考えれば、的はずれにも見えるこれらすべての発想や行動には、無駄なことや無用なもの一つもないのである。なぜならば、それらはすべて不登校問題の本質に近づくのに不可欠な親たちによる必死の働きととらえることができるからである。つまり、実りよりも傷つくことの方が多いそのがきを通して、初めて見えてくるものがあるのである。それは、わが子の苦しみへの着目が一貫して欠けていたことへの気づきといえよう。そのことの重要性に気づいてから、わが子の心の有り様が理解できるようになるまでには、さらにカウンセラーや教育相談の専門家、あるいはわが子の不登校を通して子どもの心が理解できた先輩たちからの助けが必要になるのである。

前述のように、一言で不登校といっても、さまざまなパターンがみられる。学校へ行きたいという気持ちは十分あるにもかかわらず、登校しようとするとう頭痛や発熱、吐き気や下痢などの身体症状が現れるケース。高校生の場合、現在通っている高校がどうしても自分に合わないなどの理由で、他校の再受検や転学などを望んで不登校になるケース。また、勉強なんかしたくないと思っていたのに、周りが執拗に勧めるので仕方なく高校に行ってみたが、やはり学校や勉強は嫌だと不登校になるケース。学校へ行くことはできるが、不安が強くて教室に入らず保健室登校

あるいは相談室登校を繰り返すケース。学校へ行くよりも、友達の家にいつて外泊したり、ゲームセンターなどに入り浸って不登校になるケースなど、実にさまざまである。ここでは、学校へ行きたい気持ちは十分あるのに行けないとか、学校へは登校しても教室には入れられないケースの対応について考察してみたい。

学校へ行きたくても行けないケースの場合、不登校というのは「このままでは自分がだめになってしまふ」という苦しみに直面し、そこから自分を必死に守っている姿であるにとらえることができよう。加えて、子どもの親にとつて不登校とは、命を削るほどの葛藤に直面しながらも、子どもの命と人生を守り抜くために、親としての在り方が問われる問題なのかもしれない。わが子が不登校になったら、どの親もまずわが子に何が起きたのか問い詰めることであろう。要領の得ない子どもの話に焦りと不安を募らせて、心療内科や思春期外来などに受診させる親も少なくない。そして医師からは、とくに身体には異常はなく、心の問題なので、焦らずゆっくり見守るようにとアドバイスされることが多いようである。しかし、見守るといっても何をしたらいいのか分からず、焦りと混乱がしだいに深まっていく。

すると、今まで自分が格闘してきた子育てのすべてが否定された気持ちになり、一種の徒労感や絶望感さえ感じるようになる。自分のこれまでの人生や価値観などのすべてが否定され、無意味なものであったかのようには感じられて、自分なりに持っていた自信や信念が根底から崩れてしまふ心理的体験をする人が少なくない。不登校の原因が家庭以外のところにあるのかもしれないという偏見や思い込みが崩れ、やはり家庭に原因があったのではないかと自分を責めるようになり、親としての自信を喪失していくシナリオである。絶望の淵に立たされたような心の動揺を経験する中で、ある人は、不登校に関する文献を読みあさったり、ある人は、「親の学習会」などに参加して自分と同じ経験を持つ親の話聞き

ながら、自問自答の繰り返しが続いていく。

しかし、かなりの時間をかけて迷い、学んでいるうちにやがて見えてくるものがある。それは、その自問自答の自身が自分自身の苦しみとそれを軽くするための方法でしかなかったということである。つまり、子どものために迷い苦しんでいるはずなのに、子どもの苦しみについてはほとんど何もわからうとしない、あるいは気づこうとしなかった自分に気づき始める。しかし、こうした心の変化は、親子関係の修復あるいは再構築に大きく影響することになり、とても重要な体験となるのである。なぜならば、多くの親たちにとって、こうした体験を通して自分の常識や考え方がいかに自分中心であったかということに気づくことを意味するからである。親の思い通りにならないわが子を、苦しみを抱えた一人の人間として受け止めようとする変化の始まりといえよう。

五、子ども自身の成長を通して

不登校の子どもが学校復帰をするために、学校や家庭などの環境条件が整備されることで解決される場合もあるが、それでも登校できないケースもある。そこで考えなければならぬことは、子ども自身が乗り越えなければならぬ課題である。環境条件の整備と並行して、子ども自身の人格的な成長やたくましく生きる力を育てる必要がある。どのような力が必要かについては、以下に述べる通りであるが、これらすべてを身につけることは決して容易ではない。しかし、一つでも二つでも身につける努力をしてみることで、膠着した状況から切り抜けることも十分可能である。

一点目は、「自分で決めて行動する力」である。自分で決めたことに対しては、自分で責任をもつことができるようになることが大切である。高校生の場合、たとえ自分で決めて高校に入学しても、何かトラブルが

発生するといふ誰かに責任転嫁をしてしまうことが少なくない。まるで他人事のようにとらえるのではなく、自分自身の問題として目を向けることが重要である。どういう状況ならばより学校に行きやすいか、誰がどうすればもつとできるようになるかなどについて自分なりに考え、行動してみることである。しかし、自分の力だけで乗り越えることは決して容易ではない。したがって、周囲の人たち(家庭や学校など)の協力・支援などもあればより早く解決することも多い。

二点目は、「さまざまなストレスに対処していく力」である。学校では、学業や進路問題、人間関係など、さまざまなストレスに直面することになるが、それにうまく対処できない場合に不登校に陥ることが多い。したがって、「自分が何を恐れているかについて、自分なりにつかんでおくこと」に加えて、「本人なりに抱えているストレス(緊張)と正面から取り組んでみる」勇氣と努力が必要である。例えば、本当は早退したいのに、担任から「もう少しがんばってみたら」と言われた時にどうするか、そのようなことを前もって考えておくという方法である。「今週は、午前中だけ授業を受けることにチャレンジしたいので、今日はこれで帰りたい」と思います」などと答えるのはその一例である。

三点目は、「対人関係を改善していく力」である。最近の子どもたちは、携帯メールやネット、テレビゲームなどの世界でコミュニケーションを図っていることが多くなっているせいか、面と向かってコミュニケーションを行うスキルが低下しているのではないかと思われる。学校でコミュニケーションがうまくとれなったり、人間関係に僅かなトラブルが発生したりすると、不登校に陥るケースが少なくない。対人関係やコミュニケーションのトラブルなどは、本人にとって克服しなければならぬ切実な課題といえる。例えば、保健室や相談室などの別室登校をしている子どもについては、そこでできることをしながら次第に本人とかわる教師や子どもたちとの関係を深め、広げていくことが大切である。

具体的には、登校下校時に担任か学年の先生に声をかける努力をしてみたり、別室で友人やクラスメイトと会話を試みるなどである。

四項目は、「学業への適応を図る力」である。学習内容が理解できない、学習がどんどん遅れていくなどをとても気にする子どもにとっては、教師や親が想像する以上のストレスとなつて落ち込んでいることがある。親や教師が、子どもの焦りや無力感をどのように支えるかが課題となる。子どもは、「学習が遅れてしまつていて」というイメージに苦しんでいることが多いので、少しでも学習への不安感を取り除く努力をしてみることが大切である。何をどこまで理解して、何が理解できないのか明らかにする必要があるが、そのためには、学級（ホーム）担任や教科担任等の協力・支援が不可欠となる。

不登校を乗り越えて、公務員や会社員、自営業や教員なども含めて立派な社会人として活躍している人がたくさんいる。自分自身に「不登校Ⅱダメ人間」というレッテルを貼つたり、周りがそのようなレッテルを貼らないことがいかに大切であるかということ強調したい。少し回り道をした分だけ、普通の人よりたくましく生きることができるようになる、あるいは世の中を多面的に見ることができるようになるなど、こうした経験を人生の大きなバネにしてもらいたいと強く願っている。

第二章 いじめ問題について

一、被害者の視点からのいじめ対応

けんかや悪ふざけでもなく、非行行為でもないいじめは、近年学校で発生した新しい心理的な校内暴力として位置づけられていると言つても過言ではないであろう。外に攻撃性を向ける古典的な校内暴力は、誰もが実行者を特定できることから、いわば自分の責任を明らかにした上で

行われる暴力といえる。それに比べると、近年のいじめは、自分の責任を問われないように巧妙に行われることが多い。いじめが陰湿な行為であると云われるのは、身体ではなく心理的なダメージを与えようとすること、見えない部分への攻撃の形をとること、自分で責任をとることを回避しようとする態度がみられるなどの特異性があるからである。

これまで、私は数多くの不登校事例に関わってきたが、いじめが原因で不登校に陥ったケースがいかに多かったか、そしていじめの被害者として、どれだけ苦しんだり悩んだり、あるいは自殺まで考えたケースが多かったことか、想像を絶するものがある。中には、重い精神疾患にかり、なかなか社会復帰ができない人もいるし、通院・服薬を繰り返しながら何とか社会復帰に向けて努力している人もいる。こうした現実を垣間見ながら、私に何ができるのか模索し続けている。

いじめの構造の一つは、面白半分の弱い者いじめであり、もう一つは自分より価値がある者へのねたみといえよう。いじめは心理的な攻撃であるだけに、ある攻撃行動をいじめととらえるかどうかは、多分にいじめられる側の感じ方に左右されるものと思われる。攻撃と受け止めるか、痛みと感ずるかは主観的なものである以上、集団の中では悪意がなくても相手を傷つける場合がしばしば起こる。こうした攻撃への過敏性をどのように減らせるかについても、いじめを考える上での重要なポイントになる。いじめは、子どもたちの発達上のゆがみを象徴する現象であり、小手先の対応策ではなかなか解決できない厄介な問題といえよう。さて、自分の子どもがいじめられているのを発見した場合、親としてどのようなことができるかについて考えてみたい。

一点目は、「子どもの気持ちに沿って聞いてみること」である。いじめられている子どもにとって、いじめられていることを認め、自分から話し出すことはなかなか難しいことである。親には心配をかけたくない、自分のみじめな姿を知られたくない、友達のことを先生や親に悪く言う

のはよくないとか、いじめの関係が自分の唯一の居場所であるから失いたくないなど、いろいろなケースが考えられる。いじめの事実を知ったからといってすぐに問いただすことは、かえって子どもの心を閉じさせることになるかもしれない。

とくに深刻ないじめが多くなる思春期においては、子どもにとって自分の心をつめる時期であり、自分の弱いところを突かれると納得してしまい、反論できずに沈黙してしまうことが少なくない。そんな気持ちだが、結果的に加害者をかばい、「いじめられていない」と言い張る被害者の心情なのかもしれない。いじめの事実を知った時、まずそのことを子どもに確認することから始めるが、親としてはできるだけ感情的にならずに、本人の気持ちに沿って時間をかけてじっくり聴き出すことが大切である。そうした中で、子どもの痛みを共感的に理解して、子どもの理解者として共に考え、共に歩むことを確認していくことが大切だと思われる。

最も身近な親が、自分のことを本当に理解してくれる存在であることを確認できた時、子どもは安心してさまざまな事実や自分の気持ちを語るものである。学校場面において、先生にいじめを訴えても聞いてもらえなかったり、訴えたためにいじめがよりひどくなったりするなどの経験をした子ども、先生が加害者であるいじめの場合など、言うに言えないこととして抱え込んで苦しんでいる子どももいる。急がないでじっくりと子どもの話を聴くことである。子どもにとって、話すことは心の癒しのスタートになる。そのためにも、ふだんから子どもの言動に注意を払い、話をじっくり聞いてあげる姿勢を持っていることが大切であろう。何か事件が起こった時、急に話を聞くからと言って、子どもはすぐに心を開かないことが多いからである。

二点目は、「子どもの希望を確認すること」である。いじめの事実が確認できた時、それにどう対処するかはなかなか難しいことである。例え

ば、子どもが自ら解決できないために、親が解決に乗り出す場合がある。とくに配慮しなければならないことは、子どもが自殺を図ろうとするなどに対しては、学校や関係機関等と連携しながら行う危機介入的な緊急対応などである。そのような例外を除いて、まずしなければならぬことは、子どもが何を希望し、親にしてもらいたいことは何なのかを確認することであろう。自分でも頑張ってみるから見守ってほしいのか、学校の先生に理解してもらって関わってほしいのか、少し学校を休みたいのかなど、本人のしたいこと、してもらいたいことを確認することが大切である。いじめが主として学校を舞台に起こる現状から、子どもと一緒に考えていく姿勢が大切だと思われる。

親が先走ってしまい、相手方に攻撃的に出たりすることがよくあるが、そのほとんどは失敗することが多いといわれる。失敗とは、問題の解決を遅らせたり、こじらせたりにしてしまうことである。親としても、現代社会のいじめの構造や子どもの状況を客観的に理解しながら関わる必要があるから、子ども可愛さの感情から一気に解決しようと行動することには注意する必要がある。とくに思春期の子どもたちにとって、友達を失うことは大変なことであるから、そうならないよう配慮していく必要がある。そのためにも、思春期という発達段階にある子どもたちの心理や課題についても十分理解した上で関わっていただきたい。

三点目は、「子どもの希望に沿って行動する」ということである。いじめに対する学校の取り組みへの不満と苛立ちから、被害者の親が加害者に対して暴力をふるうという事件が起こったことがあるが、親のそうした心情はよく理解できる。しかし、一般的にはそれは認められていないし、本来の意味の解決にはならないことが多い。強引に、しかも早急に解決しないと手がつけられなくなるという見解もあるが、いじめの問題は、子どもの気持ちを大切にしながら長期的に関わっていくことが基本であると思われる。子どもがしてほしいことと、親としてやれることを

確認しながら関わることが大切であろう。時として、子どもが「やられたらやり返す」などと報復的な行動に出ることがあるかもしれないが、その場合には、そのような感情になった背景を確かめながら、親子でいじめをとらえ直すことが必要である。

四点目は、「親が焦ったり感情的になって、親同士で解決しようとしないうこと」である。いじめ問題の対応を考える時、加害者に「謝罪」を求めることはもちろんであるが、加害者に対する「許し」も問題解決の重要な鍵になることがある。親が感情的になって焦ったりすると、相手を謝らせる場を強引に作ろうとしたり、親同士の対決に持ち込もうとすることがある。このような場の設定については、子ども同士、親同士の十分な理解が必要であり、教師が間に入るなどの慎重な対応が必要である。学校で起こるいじめ問題を学校を抜いた形で解決することは決して好ましいことではないし、真の解決にはならないことが多い。本人が再び学校で生き生きとした生活ができるようにするためには何が必要であり、何ができるのかということについて、子どもと一緒に考え、行動することが大切だと思われる。

二、加害者の視点からのいじめ対応

親は、自分の子どもがいじめの被害者にならないか戦々恐々としているが、逆にいじめの加害者になっていることに気づいたら、親としてどう対応したらいいのであろうか。

一点目は、「感情をまじえず事実の確認をすること」である。自分の子どもがいじめの加害者であることを知った時、「またか」という親もいるであろうが、「まさかうちの子が」と、初めて知った親の驚きと衝撃は相当大きなものであろう。すぐにその事実を問いただし、相手方へ謝罪することを考えるが、いじている子どもは必ずしも自分のしていること

が悪いことであるという自覚を持っているとは限らない。「自分だけが悪いのではない」と、自分を正当化しようとすることも多い。頭ごなしに叱ることで、言い訳のための嘘をつかせたり、口を閉ざして何も言わせないようにすることさえある。まずは、親が抱いている善悪の感情を抜きにして、やってきた事実を確認することである。子どもたちは、「いじめが面白いからしている」ということが多く、時にはゲーム感覚でいじめに加担していることがあり、自分たちがしていることがどういこうとなのかわかっていないことも少なくない。

二点目は、「いじめの背景にあるものを探る」ということである。いじている子どもの多くが、かっつけていじめられた体験をもつことも多いといわれる。これは、いじめの被害を受けている子どもが、反撃に転じて攻撃性を身につけ、いじめをくり返すパターンである。また、子どもは、親や教師、テレビ・雑誌などからもいじめを学ぶ。いじめは現代社会のひずみを映し出す鏡といわれるように、大人社会の反映でもあると言っても過言ではない。こうした子どもの行動を是認するわけではないが、行動にはそれなりの理由があるようで、それを知ることが解決のためには必要であろう。多くの子どもが、いじめの動機として「力の弱い者、動作の鈍いものを面白半分」ということ、「欲求不満、ストレスの解消」などをあげている。子どもたちのストレスに満ちた状況を正確に把握することが大切である。

とくに、子どもの攻撃性がどのような中から形成されてきたかを考えることが大切であろう。遊ぶ時間や空間が狭まり、他の子どもと関わる時間が少なくなった子ども達は、友達とうまく関わるができず、友達の気持ちかわからなくなってきている。また、学校でも家庭でも学力中心の価値観が浸透しているせいか、その重圧からくるストレス、認めてもらえないことからくる不満でいっぱいの子どもたちが増えているように思われる。毎日の生活が不満足で不安定である時、子どもはいじめ

によってそれを解消しようとする。しかし、これは子どもたちの根本的な欲求不満の解消にはならないことが多く、対象を求めていつまでも続くことになるのである。親としての子育てをふり返り、今一度反省してみることが求められているのかもしれない。

三点目は、「いじめについて、子どもと共に考えること」である。いじめは絶対に許されない行為であることを周知徹底させることが大切であるが、いじめが他人の人権を脅かす卑劣な行為であることを子どもにも理解させることは案外難しいものである。子どもたちは、理屈の世界で行動しているのではなく、感情の世界で行動していることが多いからである。面白いとかストレス解消とかいう中では、「相手の立場を考えて」ということはなかなかできないのであろう。子どもがどう考え、親はどう考えているのかなどについて、親子でじっくりと話し合うことが大切であろう。親が愛情を持って受容的に関わる時、子どもは親の言うことを理解し、他人の痛みがわかるようになるはずである。

四点目は、「謝ることの大切さを共に考えること」である。いじめの被害者が加害者に転化していく背景に、「許し」の世界がなかったことがあげられる。許しの経過を通してこそ、人は癒されるものである。相手を許すことができなかつた子どもは、怒りを攻撃に転化させることがある。いじめは、いろいろな形で学習されていく。いじめにケリをつけるためには、許しの場がなければなかなか容易ではない。いじめの加害者が誠実に謝り、一方の被害者が許せた時、いじめ問題の解決に一步近づくのである。しかし、私のこれまでの数多くの体験によると、たとえ被害者が加害者を許すことはできても、被害者の心の傷は簡単に癒えることはなく、後々まで尾を引いていくことがいかに多いかを思い知らされる。謝ることに必要であり、子どもは感情を大切にしながらゆっくりと進めることが大切である。そして、謝る場には第三者の存在が必要であり、学校で起こるいじめは、学校とよく相談して学校を通して進め

ていくことが大切であると思われる。

三、いじめ問題と向き合っていること

これまで、私はいじめられている子どもの母親や父親と面談することが何回もあったが、「私は、思いやりのある優しい子どもに育てたのではなかつたと後悔しています。いじめるくらい強い子どもに育てていけば、こんなことにはならなかつたと思います」と言われたケースがある。強い子どもとは、いったいどのような子どもなのだろうか？きれいなかもしれないが、いじめない、そしていじめに対して傍観者や被害者にならない子どもこそ、強くて心豊かな子どもではないだろうか。

自分自身の反省も含めて、現代社会の人間は、「感じる心」が弱くなつてはいないだろうか？周りの環境が許さないうために、人は喜怒哀楽を表に出さず、波風が立たないように生きていかなければならない時もあるかもしれない。しかし、それは決して人間らしい生き方とは言えないであろう。素直に自分の気持ちを表せることがまず大切であり、それをつかりと受け止めてもらうことで、人の心は広がっていくのでないだろうか。こういう状況であれば、人をいたわる優しい心や、少しぐらい自分の気に入らないところなどがあっても、受け入れるべきことを学び、寛容性も身につけていく。人を愛する心を育て、善悪のけじめをきちんとつけさせることができれば、いじめは完全になくならないまでも、少しずつ減っていくのではなからうか。

第三章 その他の問題について

アメリカの精神分析学者であるエリクソンは、人間の一生を八つのステージ（段階）に分け、各ステージには、身につけなければならない特

有の課題があると考えた。この課題解決に成功することにより、新たな能力が身についたり、精神的な成長を遂げるが、失敗すると課題は未解決のまま残り、「心理的危機」を招くことになる。エリクソンによると、青年期の課題は、「これこそが本当の自分だ」という自我同一性（アイデンティティ）の獲得である。なかなか難しいことではあるが、この自我同一性がうまく達成されないと、「自分が何者か、何をしたいのかわからない」という「同一性拡散の危機」に陥るということになる。エリクソンは、同一性拡散の一つとして「否定的同一性の選択」、いわゆる非行をあげている。

同一性拡散の状態にある青年は、社会的に好ましくないと非難されるような人物像（暴走族、暴力団など）をモデルにして、自我同一性を獲得しようとする。非行は、否定的自我同一性を選択してしまう場合と考えられている。非行の原因については、非行を誘発する誘因の増大、非行の歯止めとなる抑止力の低下などがあげられる。前者の例としては、有害環境の影響、非行集団の中におけるさまざまな学習、学業不振に基づく欲求不満、愛情不足などがあげられる。後者の例としては、非行に対する社会の許容、罰に対する認知の欠如、道徳認知の未発達、本人の性格や親の養育態度などがあげられる。

思春期は、別名「反抗期」と呼ばれるように、親や周囲の大人に対して、今までなかったような反抗を示すことがある。「反抗」と言っても、親の側から見ると、手に負える反抗、手に負えない反抗、理解できる反抗、理解が難しい反抗など、さまざまである。子どもの行動や態度を反抗として理解する時、今まで理解できなかったことが理解できるようになることもある。「子どもは親に反抗するもの。反抗は自立の第一歩であり、通過儀礼としてこの家庭にもあるもの」と構えている親もいるし、子どもの反抗に怯える親もいる。このように考えると、反抗を子どもの心理からのみ理解するのでは不十分ではないだろうか。つまり、子ども

の反抗は、親と子どもの関係性といった視点からも見ていく必要があると思われる。

多くの親たちは、子どもの反抗を目の前にとゆとりを失い、自分の親との関係にまで思いが至らないのが普通である。しかし、子どもの反抗をきっかけに、自分をふり返る絶好のチャンスであると考え直してみることもし決して無駄ではない。過去の自分をふり返ってみると、今度子どもにゆとりをもって接することができるようになる。子どもの方にもそれが伝わり、悪循環ではなく好循環が生まれることが多い。

ところで、家庭の中ではとくに反抗的な態度の子どもよりも柔順な子どもの方が一見扱いやすいが、そうした子どもが学校内においては、いじめの加害者になっていたり、学校外では非行を犯す者もいるようである。家庭で見ると子どもからは想像できないだけに、親のショックも大きいものと思われる。一般的に、威圧的な父親とか過干渉の母親の元で育った子どもというのは、家庭内では抑圧されているためにいい顔をしているが、そのかわり家の外で鬱積した不満やストレスを発散する傾向があるとされている。

万引き、窃盗、家出、家庭内暴力、不純異性交遊など、反社会的な問題行動を起こした子どもたちを収容し、矯正治療教育する専門施設がある。私は、かつて若かりし頃、このような「教護院」（現在の児童自立支援センター）に勤務した経験がある。多くの非行少年・少女、そして保護者と向き合うチャンスに恵まれ、彼らから多くのことを学ぶことができた。こうした貴重な経験も、今日の私の大切な財産となっている。

遅かれ早かれ、子どもの非行を知ることとなった親は、子どもの非行が万引きなどの軽いうちに手を打つ必要がある。子どもの本音を引き出すためには、親自身が本音で迫ることが大切である。親が建前だけで終わるようであれば、子どもの非行は簡単には収まらない。子どもの非行が発覚した際に重要になってくることは、夫婦仲がいかどうかとい

う点である。どちらかが片方を責めるなど、夫婦の葛藤が子どもに伝わると、子どもはより精神的に不安定になっていく。初発非行の段階での対応が、その後の非行を深刻化してしまうか、あるいは沈静化させるかの分かれ目になると思われる。

これまで取り上げてきた子どもの反抗とは別に、自暴自棄的な反抗がある。非行の場合には、学校や警察といった関係機関が絡んでくるので、親はそうした関係機関との関係を持たざるを得なくなる。しかしながら、家庭内暴力の場合は、なかなか第三者の介入が困難である。子どもの暴力に怯え、最悪の事態となる場合、親が思い余って子どもを殺害することとまで発展するケースがある。家庭内のことは家庭内で何とか解決しようという親の気持ちは痛いほど理解できるが、やはり限界があると言えよう。どうあがいても、どうにもならないこともある。

こうした問題についても警察などの関係機関に相談するというのも選択肢の一つであるが、気心の知れた信頼できる知人や友人に勇気を出して家庭の事情を話してみることも必要であろう。子どもの暴力に恐怖感を抱くような場合には、親だから我慢しなければならないといった思い込みは捨てる必要がある。自暴自棄的な破壊行動を特徴とする家庭内暴力の場合、荒れたわが子を他人に見せたくないのが親の正直な心境であろう。このような子どもの場合、他人に対しては意外にも極めて礼儀正しく接することがあるため、他人には信じてもらえないことが多い。この点を逆手にとって、親族なり知人が出入りできるように風通しのよい家庭にしておくことが大切であろう。子どもの反抗を深刻化させてしまう家庭には、「ユーモアに欠けて生真面目である」という共通した特徴がみられるという。冗談とか笑いが飛び交う家庭が大切であるということであろう。

家庭内暴力を起す少年には、喜怒哀楽の乏しい無表情の少年が多いというが、何年も心の底から笑ったことがないのかもしれない。家庭内

暴力が、いわゆる神経症や統合失調症などの精神病に発展している場合もある。思春期を専門とする心療内科や精神科などに相談することも大切かと思われる。まずは近くの公的機関、つまり保健所、警察、児童相談所などを訪ねることをお勧めしたい。相談に訪れる時、緊張や不安のために伝えたいことを的確に伝えられないことがあるので、子どもの状態を客観的にメモして持参する方法がある。初回面接にはできるだけ両親揃って相談することをお勧めしたいが、無理は禁物であり、危機感の強い親がまず相談に行くことが大切だと思われる。

近年、発達障害を抱えた子どもたちに対する特別支援教育がクローズアップされている。私は、スクールカウンセラーとしても、大学生相談室の専任カウンセラーとしても、このような問題にも取り組んでいる。自閉症、学習障害、ADHD（注意欠陥多動性障害）など、特別支援教育の対象になる子どもたちは、周囲の理解や協力などが得られないと暴れたり、強く落ち込んで不登校やひきこもりなどの二次的障害を引き起す危険性をはらんでいる。こうした発達障害は、親の育て方や本人の性格などの問題ではなく、脳機能の障害から派生するものではないかと言われている。発達障害を抱えた子どもたちの中には、他人とうまく関わるのが苦手というハンディなどはあるものの、素晴らしい才能を秘めた子どもたちも少なくない。したがって、こうした子どもたちの短所を指摘するよりも、できるだけ長所を伸ばしてあげることによって優れた才能を引き出すことができるのではないだろうか。

第四章 最後に（大人の自覚と責任）

私は、これまで非行少年などを矯正治療教育する「児童自立支援センター」（かつての教護院）、不登校の子どもたちの学校復帰等を支援する「教育支援センター」（適応指導教室）など、普通の教員ではなかなか経

験できないような貴重な勤務体験をさせていただいた。とりわけ、不登校の子どもたちの学校復帰等を支援する教育支援センターでの勤務体験は、私の教育・研究活動に大きな示唆を与えてくれる。

前述の「不登校問題について」の部分で提言を試みたが、不登校の子どもが学校復帰するためには、本人の状態はもちろんのこと、とりわけ教室の子どもたちや教師などの受け入れ体制の準備が必要である。それでも登校できない場合、こうした教育支援センターの活用をぜひお勧めしたいのである。ここには、経験豊富なスタッフ、そして現場の教員が研修の一環として不登校の子どもたちに関わっている。個別的な関わりや小集団活動などを通して、子ども「自分で決めて行動する力」「対人関係を改善していく力」「学業への適応を図る力」などが培われる。

ここにやってくる子どもたちの傾向としては、自己肯定感が低かったり、他人の視線や評価などにすこぶる過敏であったり、思うように自己表現ができなかったり、対人コミュニケーションが苦手などの特徴がみられる。しかし、ここでスタッフと子どもたち、子どもたち同士の信頼感や温かい人間関係が構築されるようになると、信頼感や安心感の得られた子どもたちの変化には目を見張るものがある。私は、このような素晴らしい体験をさまざまな教育活動に生かしていきたいと考えている。

私たち大人は、本当に子どもたちを観ているのだろうか？ 本当の子ども姿をしっかりと観ることから始めなければならないような気がする。はじめを発見したことをきっかけに親子関係を考え直したり、子育ての在り方などを見直したりすることができる。そのような気持ちで、改めて子どもと向き合う必要はないだろうか。現在の日本の教育をめぐる現状には問題が山積し、極めて厳しいものがあるが、はじめをしない、はじめに負けない、心豊かな人間を育てること、それが家庭や学校、さらには日本の教育の重要な課題の一つではないだろうか。

今日の子どもたちの多くは、日本の未来や自分の将来を悲観的に見て

いると言われる。したがって、力強い人生目標を設定できなくなっているのかもしれない。我々大人にできることは、今日の子どもたちに少しでも夢を持てる環境づくりをしてあげることではないだろうか。これからの日本の未来を背負う子どもたちのために、我々大人が何ができるか、改めて考え直し、実行する必要に迫られているといえよう。

【参考・引用文献】

1. 小林正幸編著『実践入門 教育カウンセリング』（川島書店、二〇〇〇年）
2. 高 賢一著『教育相談の視点を生かした学校づくり』（教育開発研究所編「学校教育研究第二三号」、一九九八年）
3. 高 賢一著『適応指導教室における高校生の支援活動に関する研究』（日本特別活動学会研究紀要第一四号、二〇〇一年）
4. 高 賢一著『学校復帰への意欲とエネルギーが蓄積されたAさん』（学校教育相談研究所編「月刊学校教育相談九月号」、二〇〇五年）
5. 高 賢一著『石川県における子どもの健全育成に関する考察』（金沢星稜大学経済研究所年報第二七号、二〇〇七年）
6. 高 賢一著『教育相談の軌跡と課題』（上越教育経営研究会編「教育経営研究一三号」、二〇〇七年）
7. 高 賢一著『教育支援センターから再出発する子どもたち』（日本生徒指導学会編「生徒指導学研究第七号」、二〇〇八年）
8. 高 賢一著『不登校の子どもを抱える親のグループ学習会の意義と課題』（日本学校教育学会第二二回研究大会発表論文集、二〇〇八年）
9. 高 賢一著『ひきこもりのプロセスと心理に関する考察』（金沢星稜大学人間科学会編「人間科学研究第二巻第一号」、二〇〇八年）
10. 高 賢一著『ひきこもりの具体的対応方法に関する考察』（金沢星稜大学人間科学会編「人間科学研究第二巻第二号」、二〇〇九年）